東京・杉並区長選挙から学ぶ

たまたまフェイスブック仲間の投稿から、杉並区長選挙のことを知った。グローバルに活躍する岸本聡子さんが候補者というので、なんだか関心をもった。杉並区というと、高度成長時代に「東京ごみ戦争」を思い起こす。杉並清掃工場建設をめぐる住民運動だ。また日本の都市研究の第一人者で、東京都でも活躍された柴田徳衛先生が杉並区にお住まいだったので、親近感をもっていた。

6 月 20 日午前、杉並区長選挙の開票が行われたが、ネットで区開票速報を注視した。僅差であったが、岸本さんが現職を破って当選した。「デモクラシータイムス」という番組をユーチューブで見つけて視聴した。「岸本聡子はなぜ勝った?」を、選挙対策本部長の内田聖子さんが解説していた。その内田さんが 18 日のおおさかコモンズ「学習会」で、ゲストスピーカーとして区長選挙について裏話を含めて語った。写真はそのときのものだ。コモンズが内田さんのスピーチをリアルにまとめているので紹介したい。

選対本部長を務めた内田さんは、岸本さんを「さっちゃん」と呼びます。ベルギー在住の岸本さんに「いっそのこと、さっちゃん出たら?」と声をかけてから、岸本さんの選挙戦がスタートした!?といっても過言ではなさそうです。草の根の民主主義を実現できる候補者を探そうと、市民運動や住民運動をしていたメンバーでネットワークを立ち上げ、まちの課題の見える化を図ったり、コツコツと活動を続けても、簡単に候補者は見つかりません。6 月の区長選まであと 3 か月とリミットは迫っていました。そこで先ほどのセリフ。

政党ありきではなく、地域に粘り強い市民運動があり、市民主導の選挙活動があったからこそ、野党共闘も追い風となり当選できた。という分析に納得。内田さんの「やさしい熱狂。楽しい運動。やかましくないムーブメント」という選挙総括がしっくりきました。

写真の岸本さんが座って市民の声に耳を傾ける姿、駅前で「ひとり街宣」をするボランティアに注目した。大阪市廃止の是非を問う住民投票の日、近所の投票所前でひとりポスターを掲げて、すこし立っていたことを思い起こす。質疑応答のさいごに、来年度の地方選に向けて。おおさかコモンズさんも志向されている「ゆるやかな関係性づくり」を通じた住民自治を養う土(空気感)づくりが大切だと思います。

難しい問題ではなく、党派性も問わず、おしゃべりすることからはじめ、立候補したい人が出てきたら、みんなで「信じる」こと。そして全国の仲間で連携しながら、「希望のポリティクス」をつくっていきましょう。

(2022 年 7 月 26 日)